

講座

中古文学概論

―「物語」と「日記」―

藤井 由紀子

「物語」と「日記」は、相互に影響しながら発展していった。初期の物語である『竹取物語』『落窪物語』は、非現実的な結婚形態を描く。「それごと」だからこそ、女性に渴望されたと言える。そのような「物語」の虚構性を超えるべく、『蜻蛉日記』が生み出される。以降、「日記」は、女性が自身の半生をつづるといふ大きな特徴を持つことになった。『源氏物語』は、『蜻蛉日記』を意識しつつ、「物語」の真实性を追求した。写実性を高めたことで多くの男性読者を獲得し、「それごと」としての「物語」の限界は突破されたのであった。

一 初期物語の実相

永観二年（九八四）成立の『三宝絵』（絵を伴ったとされるが、説話部分のみが現存）は、学者である源為憲が、十七歳という若さで出家した冷泉院皇女・尊子内親王に送った仏道入門書的な説話集である。その「序」に、「物語」について語られる箇所がある。

又物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物、オホアラキノモリノ草ヨリモシゲク、アリソミノハマノマサゴヨリモ多カレド、木草山川鳥獣モノ魚虫ナド名付タルハ、物イハヌ物ニ物ライハセ、ナサケナキ物ニナサケヲ付タレバ、只海アマノ浮木ノ浮カベタル事

ヲノミイヒナガシ、沢ノマコモノ誠トナル詞ヲバムスビオカズシテ、イガヲメ、土佐ノオトゞ、イマメキノ中将、ナカキノ侍従ナド云ヘルハ、男女ナドニ寄セツ、花ヤ蝶ヤトイヘレバ、罪ノ根、事葉ノ林ニ露ノ御心ヲトゞマラジ。 (六頁)

「オホアラキノモリノ草」や「アリソミノハマノマサゴ」は、数え切れないものの例として挙げられている。その「草」や「砂」よりももっと多く存在しているのが「物ノ語」なのだという。その内容が、「物イハヌ物ニ物ライハセ」たりする荒唐無稽なもの、あるいは、「男女ナドニ寄セツ、花ヤ蝶ヤト」言う浅薄なものばかりで、所詮は「女ノ御心ヲヤル物」ではない。「物ノ語」は「誠トナル詞」

を語らない、つまり、〈嘘〉でしかないのだから、そのようなものに心を奪われることなく、真実を追究する經典を重視せよという主張は、この書物の執筆目的を考えれば、当然の言説であると言える。

ただし、為憲の意図とは別に、このくだりは、十世紀の「物語」の様相を伝える記録として重要である。すなわち、『三宝絵』の時代までに成立していたと考えられる「物語」で、現存するものはごくわずかであるにもかかわらず、実際には、大量の「物語」が世間に流布していたのだということ。また、仏道に対する心構えを説く書の「序」に、「物語」のことを書き記さなければならなかったということは、裏を返せば、若い女性にとって、「物語」とは非常に魅力的なものであったということ。為憲は、「物語」の存在意義自体を否定しようとしているが、それがかえって、「物語」の大衆性の高さを示しているのである。

では、初期の「物語」とはどのようなものであったのか、現存作品からその実相を探ってみよう。

前稿で触れた通り、「物語」の始発に位置づけられるのは、『竹取物語』であった。その成立は九世紀末から十世紀初期と目されているが、『万葉集』に「竹取の翁」の詠んだ長歌が載る（巻十六・三七九一）ことから、「物語」としてまとめられる以前、相当に古い時代から、「竹取の翁」をめぐる民間伝承が存在していたと考えられる。『竹取物語』という「物語」とは別に、『今昔物語集』（平安後期成立の説話集）や『海道記』（一二三三年成立の紀行文）には、内容的には『竹取物語』と大同小異の「かぐや姫」説話が収められており、

さらに、中世の古今集注釈書『古今集為家抄』『古今和歌集序聞書三流抄』には、かぐや姫が帝の妻となり、月日を経たのち、天女であることを告白して消え失せてしまうという内容を持つものも見出せる。これらは、『竹取物語』から派生したのではなく、「物語」化される以前の、『竹取物語』と同源の伝承から発生したものと捉えるべきであろう。人間と契りを結んだ天女が、縁が尽きて昇天するという話の筋は、いわゆる「天人女房」譚として、昔話に広く見出せる話型の一つでもあり、あるいは、帝と結ばれる形の「かぐや姫」説話こそが、最も始原的な形を残しているのかもしれない。だとすれば、『竹取物語』の作者は、「かぐや姫」を誰とも結ばれない女性として、意図的に造型し直したのだということになる。帝の求愛を拒絶することは、当時の社会常識から大きくかけ離れた行為である。それを「かぐや姫」は、「この国の人にもあらず」（六五頁）という設定によって成し遂げる。およそ現実的な話ではないとはいえず、日本最古の「物語」が、結婚を拒否する女性を主人公としていることには、注意を払っておきたい。

このような結婚に対する主題性は、十世紀後半に成立したと目される『落窪物語』にも通底するところがある。『落窪物語』は、「継子いじめ」をテーマとした作品であり、伝奇性の強い『竹取物語』とは異なり、あくまで現実的な内容を持つ。しかしながら、ヒロインである落窪の君と結婚したのちの男君（中将）は、物語冒頭で「いみじき色好み」（巻一・二二頁）とされた性質を擲って、彼女一人を愛する男性へと変貌するのである。経済的な後ろ盾を持たない落窪

の君だけを妻として遇する中将に対して、乳母は、「君達は、はなやかに御妻方のさしあひて、もてかしづきたまふこそ今めかしけれ」（巻二・一九一頁）と、右大臣家の姫君との結婚を勧める。乳母は、物語の展開上では憎まれ役として登場するが、その台詞に「今めかし」とある通り、ここでは当世的な考え方を述べているにすぎない。妻方の経済力の有無は、いまだ婿取り婚が主流であった平安前期においては、男性の政治的生き方にも大きく影響したのである。しかし、中将は乳母の勧めを拒否し、あくまで一夫一妻を貫く。これもまた、現実世界には大きく反するヒーロー像であった。

すなわち、初期の物語に共通するのは、現実には起こりにくいことを描いているという点であり、さらに、その非現実性が、こと、「結婚」という事柄に集約的に表されていることを考えるならば、『三宝絵』が述べていた通り、「物語」の主要な読者は女性たち、就中、まだ若い、未婚の姫君たちであったと考えられよう。たしかにそれは、「誠トナル詞」ではなかった。しかし、そうであるからこそ、一夫多妻の時代に鬱屈していた「女ノ御心」を満足させるものとして、熱狂的に読まれていたことが想像されるのである。

二 日記文学の発生

『竹取物語』『落窪物語』いずれも、その作者は未詳である。知識ある男性の手によるものというのが通説だが、想像の域を出ない。「物語」がそもそも「語り」であった以上、たとえそれが書き記さ

れたとしても、特定の作者一人の創造物であるという概念自体が当て嵌まりにくいジャンルであったとも言える。事実、「物語」は、書かれ、読まれ、写されていくその過程において、さまざまな人の手が加わって流動していくものとしてあった。

女性が文学の「書き手」として明確に登場するのは、だからこそ、「物語」というジャンルにおいてではなかった。『土佐日記』の成立から遅れること約四十年、九七五年頃に成立したと目されている『蜻蛉日記』は、初の女性の手になる日記文学である。作者は、藤原道綱母。地方国司を歴任した藤原倫寧を父に持つこの女性は、中流階級の出自でありながら、優れた歌人として、若き頃よりその名が知られていたらしい。やがて、のちに天下人となる藤原兼家の求婚を受け、妻の一人となる。しかし、兼家との結婚生活は、道綱母にとって、決して幸せと呼べるようなものではなかった。その兼家との関係性を中心に、天曆八年（九五四）から天延二年（九七四）の約二十年間の出来事をつづったのが『蜻蛉日記』である。日記冒頭、道綱母は、この作品を記そうとした意図を明確に記している。

かくありし時すぎて、世の中にいともとはかなく、とにもかくにもつかで世にふる人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かう物の要にもあらであるもことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中に多かる古物語の端などを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人もあらぬ身のうへまで書き日記してめづらしきさまにもありなん、天下の人の品高きやと問はんためしにもせよかし、とおぼ

ゆるも、すぎにし年月ごろのこともおぼつかかりければ、さも
 もありぬべきことなん多かりける (上・三九頁)

道綱母は、まず、自分自身を、「世にふる人」と三人称で作品中に
 登場させる。前例の乏しい「日記」を書き始める際に、ひとまずは
 「物語」の叙述方法に倣ったものと説明されるが、実際に、道綱
 母は、強烈に「物語」というジャンルを意識していたようだ。日々
 なすこともなく、無聊を慰めるために手に取った「世の中に多かる
 古物語」は、「世に多かるそらごと」さえ書き記している。「そらご
 と」とは、作り事のこと。虚構である「物語」は、総体として「そ
 らごと」でしかないのであるが、そのような「そらごと」でさえ世
 間では多く読まれているのだから、人並みでない自分の身の上であ
 っても「書き日記して」みれば、それは、紛れもない「真実」であ
 るという点において、「物語」以上に「めづらしき」ものとなるので
 はないか。ここに、先に見た『三宝絵』序にも通じる姿勢を見出
 すことができるだろう。

道綱母が超えようとした「古物語」とは、『竹取物語』や『落窪物
 語』に見られるような、現実には起こりえない〈女の幸福〉を描く
 ものであったに違いない。その「誠トナル詞」ではない「そらごと」
 を否定するために、道綱母は、自身の「身のうへ」を語ろうとして
 いるのである。しかし、その「身のうへ」を記すための手段として、
 なぜ、道綱母は、「日記」という形式を選んだのであろうか。先に述
 べた通り、道綱母は、歌人としても高名であった。自身の歌を集め
 て、私家集を編むという手段も十分に考えられたはずである。実際

に、『蜻蛉日記』上巻は、兼家との贈答歌を中心に、私家集的な趣を
 持つ。『蜻蛉日記』を、道綱母のみならず、兼家および道綱の私家集
 として捉える向きもあるのだが、それでもなお「日記」という形に
 拘れば、道綱母は、韻文には達成できない何かを、散文に認めてい
 たということになるのではないか。

『蜻蛉日記』上巻を読み進めるとき、散文の力が急激に強くなる
 のは、「町の小路の女」に関する記事からである。兼家は、八月に道
 綱母が道綱を出産したのち、九月からこの女に求婚し始め、十月に
 は通うようになったらしい。妻としての初めての試練に、道綱母は
 嫉妬の感情を隠さない。女が子を産むとき、道綱母の家の前を大騒
 ぎしながら移動する様子を見て、「ただ死ぬるものにもがな」(五二
 頁)と思ひ、その子が男子であったと聞いて、「いと胸ふたがる」(五
 三頁)。しかし、そのあと、女に対する兼家の寵愛が衰え、産んだ子
 まで死んだと聞いて、「いまぞ胸はあきたる」(五六頁)と、露骨な
 感情を記すのである。これらの赤裸々な告白が、さまざまな形式に
 縛られた和歌に表現できたはずがない。自身の心の内をありのまま
 に語ろうとすれば、その思考を再現する形は散文において他にない。

さらに言えば、道綱母にとって「日記」を書くことは、自らの
 人生を〈物語〉化する営為であったことも疑いない。下巻に至ると、
 道綱母が直接見聞きしなかった事柄までもが描かれるようになり、
 「物語」的な叙述が増えていくと言われているが、日記冒頭、「世に
 ふる人」と、自身を物語の主人公のように書きだした道綱母には、
 当初から、「日記」と「物語」の境界の曖昧さが十分に意識されてい

たように思われる。ある一人の人物の人生は、他者がそれを語るとき、「物語」となり、自己がそれを語るとき、「日記」となる。十一世紀初頭に成立した『和泉式部日記』が、古くは『和泉式部物語』とも呼ばれていたことからわかるように、「誰が」語っているのかという点を除けば、「日記」も「物語」も、同じ〈物語〉なのであった。道綱母は、「古物語」を超えるものとして、「身のうへ」を「物語」り、それが、結果として、女性が自分の半生をつづるという「日記」文学の大きな特色を確立させたのであった。

三 『源氏物語』の達成

『蜻蛉日記』成立以降、女性の手になる日記文学が隆盛する。「随筆」とジャンル分けされる『枕草子』も日記的章段を持ち、完成された「日記」となる前の草稿的作品と見なすこともできる。『紫式部日記』もまた、『枕草子』と同じく、宮仕え生活の記録としての一面を持ちつつも、作者である紫式部の内面描写が折々に挟み込まれ、その人物性をうかがうことのできる作品として重要である。就中、この「日記」が残されたことによつて、『源氏物語』の作者が特定されたことの意義は大きい。平安の「物語」において、作者がはっきりとわかるものは、『源氏物語』以外にはほとんどないのである。

紫式部は、藤原為時の娘として生まれる。父・為時は、優れた文人であったが、受領どまりの中流貴族であった。式部は、二十代後半になって、二十歳も年上の藤原宣孝と結婚するが、二年の後に、

宣孝は死去。寡婦となった式部を支えたのは、「はかなき物語」（二八六頁）だったことが、『紫式部日記』に回想されている。おそらくは、この時点で、紫式部は単なる「物語」の読者だっただけではなく、既に作者でもあったのだろう。その「物語」は評判を呼び、やがて、時の権力者・藤原道長によつて、娘・彰子（一条天皇中宮）の女房として召し出されることになる。寛弘二年（一〇〇五）頃のことであった。

『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）十一月一日の記事は、彰子の産んだ皇子・敦成親王（のちの後一条天皇）の五十日の祝宴の様子が描かれる。その席で、当代随一の文化人であった藤原公任が、「あなかしこ、このわたりに、若紫やさぶらふ」（二八三頁）と、紫式部に語りかけたことが記されている。この記事によつて、一〇〇八年には、少なくとも、ヒロイン・紫の上が登場する若紫巻は宮中で広く読まれていたこと、そして、その読者は女性たちだけではなく、公任を筆頭とする男性貴族にまで広がっていたことが知られるのである。『紫式部日記』には、「内裏の上の、源氏の物語、人に読ませ給ひつつ聞こしめしける」（三一四頁）と、一条天皇までもが『源氏物語』を読んでいたことが記されている。ここに「女ノ御心ヲヤル物」であった「物語」の限界は、打ち破られたのであった。

なぜ、所詮は「そらごと」にすぎない『源氏物語』が、これほどまでに多くの読者を獲得し、後代の文学作品に大きな影響を及ぼすほどの力を得ることができたのだろうか。その答えは、『源氏物語』螢巻の中で、光源氏自身によつて語られている。

その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝えさせまほしき節ぶし

を、心に籠めがたくて、言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よき事のかぎり選り出でて、人に従はむとては、

またあしきさまのめづらしき事をとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外の事ならずかし。(中略) ひたぶるにそら

ごとと言ひはてむも、事の心違ひてなむありける。(二〇四頁)

「ありのまま」ではなく、「よきもあしきも」それを大仰に語るのが「物語」ではあるが、それらはすべて「この世の外の事」ではない、と、光源氏は言う。「ひたぶるにそらごとと言ひはてむ」という箇所には、『蜻蛉日記』冒頭部が意識されているのかもしれない。誇張はありこそすれ、それを「そらごと」と言い捨ててしまふのは事の本質を取り違えている、という主張には、道綱母と同じく「古物語」を超えようとしつつも、あえて、同じ「物語」という形式を選んだ紫式部の自負が投影されているようにも思われる。すなわち、虚構であるがゆえに、さまざまな人物の人生を語りうる「物語」には、一人の人物の人生しか語らない「日記」以上に、「この世」の真実を映し出すことができるのだ、と。

『源氏物語』の卓越性はさまざまな点において指摘できるが、多くの男性読者を獲得したのは、その写実性によるところが大きい。史実を下敷きにし、故事を散りばめ、現実世界にも起こりうる出来事を描いた『源氏物語』は、「誠」と「そらごと」の両側面を含みつ

つ、たしかに「古物語」をも、「日記」をも、大きく超越するものとしてあつたのである。

使用テキスト

- ・『三宝絵』『蜻蛉日記』『紫式部日記』 新日本古典文学大系(岩波書店)
- ・『源氏物語』 日本古典文学全集(小学館)
- ・『竹取物語』『落窪物語』 新編日本古典文学全集(小学館)